

第二十回 小中学生

# ふるさとの詩

入賞作品集



羽生市

# 第二十回 小中学生「ふるさとの詩」入賞作品集 目次

◎ 小学生の部（五十音順）

太田玉茗賞 夕立のプレゼント

吉田 智香

井泉小学校

三年

1

宮澤章二賞 矢印の方向

矢吹 晴

羽生南小学校

五年

2

優秀賞 大好きな小学校

末柄 美愛

村君小学校

六年

3

はじめての海

中野 怜

手子林小学校

二年

4

心の対話

吉田 千紘

井泉小学校

六年

5

奨励賞 あいのダイヤ

高野 優理奈

須影小学校

三年

6

おじいちゃんのバス

滝内 理仁

新郷第一小学校

一年

7

ぼくとおとうさんのしょうがっこう

萩原 雅稀

三田ヶ谷小学校

一年

8

ぼくのひまわり

廣澤 蒼人

三田ヶ谷小学校

一年

9

わたしの好きな音

古谷 彩結

羽生北小学校

四年

10

その他の良い作品

11

◎ 中学生の部（五十音順）

太田玉茗賞 サブメンバー

高橋 里桜

東中学校

三年

12

宮澤章二賞 曾祖母の味

古谷 柚結

西中学校

二年

13

優秀賞 桃のパワー

木村 悠聖

東中学校

三年

14

私のふるさと

柿崎 未来

東中学校

三年

15

一点

山下 心暖

南中学校

三年

16

奨励賞 今年の夏は…

小澤 叶愛

東中学校

三年

17

じいちゃんとの思い出

木暮 奏南

南中学校

一年

18

僕のがこれ

関根 玲冴

西中学校

一年

19

繰り返す

羽生 睦翔

南中学校

二年

20

音が教えた大切さ

濱野 颯介

東中学校

二年

21

その他の良い作品

22

## ◎小学生の部

### 太田玉茗賞

#### 夕立のプレゼント

井泉小学校 三年

吉田 智香

『ピカッ。』と光った。

思わずわたしは耳をふさいだ。

びっくりして、いすから落ちそうになるくらい大きな音がした。

父と母がわらって、わたしの顔を見た。

姉もびっくりして、わたしの方にゆつくりと耳をふさいだままふりむいた。

わたしと姉が思わずわらってしまいそうになったしゅんかん、次の光が目の前に落ちてきた。

「来るよ。」

父が言い終わらないうちに次のぼく音が落ちてきた。

しばらく、わたしは生きた気持ちがいなかった。

数十分後、うそのようにあらしはいなくなっていた。

「まあ、すごいね。見てごらん。」

うすでのカーテンを開けながら、母がこちらにふりかえって言った。

「わああ。」

わたしの口をついて出てきた言葉。

それくらいきれいで大きなじが羽生の大空いっぱいにかかっていた。

「きれいだね。」

姉が言った。

わたしは、「にじって本当に七色なんだなあ。」ってあらためて思った。

なんだかきぼうがかなう色に思えた。

ながれ星じゃないけれど、いったい何とおねがいしようかな。

何かおねがいしないともったいないようなすてきなじが、そこに生えていた。

生きているきぼうの木のように。

夕立はとってもこわかったけれど、こわい後にはこんなすてきなプレゼントもあるんだな。わたしの心も家ぞく全いんの心も明るい七色になった。

## 宮澤章二賞

### 矢印の方向

羽生南小学校 五年

矢吹 晴

「矢印を自分に向けよう」

コーチの口ぐせ

ぼくが好きな言葉

ぼくが今のサッカーチームに入ったのは半年前

思うようなプレーができず、試合にも出れなかった

パスがこない

カバーをしてくれない

コーチの言ってることが分からない

まだチームになれていないから

そんなぼくの考えを見すかしたように

コーチが言った言葉が

「矢印を自分に向けよう」

だれかや環境のせいにしてない

自分で決める

自分が動く

自分から変わる

ぼくの矢印はどこに向いていたんだろう  
だれかのせい環境のせいにしていたことに  
「はっ」と気づいた

パスがほしいなら自分でもらいに動こう

カバーしてほしいなら自分が声をだして要求  
すればいい

コーチの言葉を理解したいなら自分から何度  
でも聞けばいい

チームになじむには自分から話しかけよう

ぼくは今レギュラーになった

「矢印を自分に向けよう」

コーチの口ぐせ

ぼくを変えてくれたまほうの言葉

## 優秀賞

### 大好きな小学校

村君小学校 六年

末柄 美愛

百五十一周年

歴史と伝統のある私の小学校

私のお母さんもおばあちゃんも

ひいおじいちゃんも

みんなこの小学校の卒業生

おばあちゃんが通ってたころは

木の校舎だったこと

お母さんが通ってたところに

今のプールができあがったこと

その他にもたくさんのお話を聞いた

とってもなつかしそうに

話してくれた

私もこの小学校で友達や先生達と

つくったたくさんのお思い出がある  
自然がいっぱいで

学年関係なくみんな仲良しで

先生も笑顔でやさしくて

そんな私の大好きな村君小

でも今年で閉校になってしまふ

とっても悲しいしさみしい

私だけでなくお母さんもおばあちゃんも

きつと地域の人もさみしいと思う

当たり前にあつた学校がなくなるのだから

私は閉校になつても

この村君小で過ごした六年間は

絶対に忘れない

この先もずっと

私にとつての母校

私の自慢の母校だから

長い間 ありがとう

あと半年くらいしかないけど

最後に最高の思い出たくさんつくりたいな

## はじめての海

手子林小学校 二年

中野 怜

わたしは、一年生のとき

はじめて海に行った。

キラキラしてて、

すごく広かった。

なんで海は、

こんなに広いんだろう。

わたしが近づくとにげて、

わたしがにげると近づいてくる。

ふしぎだな。

なみは、どこから

くるんだろう。

じしよでしらべてみた。

「風などによっておこる、

水めんの高ていのうんどう。」

と書いてある。

うんどう？

海はうんどうしてるんだ!!

あせをかくから

こんなにしょっぱいんだ!!

ことしの夏も海に行く。

貝がらひろいをしたい。

うきわをもつて行って、

海の上に着きたい。

たくさんあそんで

あせをかい

海をもつと

しょっぱくするぞ!!

## 心の対話

井泉小学校 六年

吉田 千紘

「パパ、このいろどりいいでしょう。」

「千紘が一生けん命作ったから、きつとじいちゃんもみんなも喜んでいるよ。」

父が言った。

私は少しとく意になった。

父の手がしめなわのあみこみを少し広げ、私  
がそのすき間にこよりの先たんを入れてかざ  
りつける。

「とももやる。」

妹も色紙を数色選んで、小さな指先でその先  
たんをこよりにする。

父の手がまた動く。

妹の色紙もきれいなおぼんかざりの一部にな  
った。

いつもは祖母とみんなで作るおぼんのおかざ  
り。

しかし、今年、祖母はここに居ない。

祖母は一ヶ月半前に頭にたまった血液をぬく  
大手術をした。

なくなった祖父やひいじい・ばあちゃんに、  
祖母の元気なすがたを願いながら、思いをこ  
めて、一生けん命おかざりを作る。

「うん、きれいにできたね。今年もよいおぼ  
んになるね。」

父が笑顔で言った。

みんな笑った。私も笑った。

父が仏<sup>ぶつ</sup>だんのろうそくに火をとます。

明るく周りを照らすろうそくの火。

父がお線香とます。

何かは聞こえないが、目をとじて話す。

私も父と妹に続いて、お線香をかたむける。

火がろうそくから線香に移る。

私は、じつと願いをこめて、線香たてに線香  
をたてる。

一すじのけむりがすうっと仏<sup>ぶつ</sup>間に立ち上る。

明日からおぼん。

ご先祖様がねむる羽生のお墓に墓参り。  
私の心が安らかに落ち着く羽生の場所。

## 奨励賞

### あいのダイヤ

須影小学校 二年

高野 優理奈

「あいぞめって知ってる?。」

わたしのあいぞめとの出会いは

この母の一言からはじまった

あいぞめは昔から続くでんとう工げい

よく見かけるが何も知らない

わたしはあいぞめ体けんに行くことにした

くさい

どこに行ってもくさい

はなをつまんでもくさい

はじめてかぐにおいだ

あんないしてくれた人は何も思わないのか

わたしのあいぞめ体けんがはじまった

ハンカチをえらび

青黒いえきにつけようとしたとき

「わゴムでむすぶとダイヤができるよ。」と  
いいな、ダイヤを作りたいと思った

ギユツギユツギユツ

ハンカチをわゴムで三かしょむすんだ

手ぶくろをつけて

青黒いえきの中に手を入れた

くさいけどだいじょうぶかな

少し心ばいになりながら

ハンカチを水であらいながした

あ、キレイな色

キレイなダイヤのもよう

うれしくて早く家にかえりたくなった

ハンカチを毎日使いたくなった

きつとわたしの友だちも

あいぞめを知らない

このキレイなハンカチを持って

二学き友だちに話したい

友だちがだれかに話して

またその友だちがだれかに話して

羽生のあいぞめのことをもつともつと

知ってほしい

## おじいちゃんバス

新郷第一小学校 一年

滝内 理仁

ぼくのおじいちゃんはバスのうんてんしゅ。おおきなバスにたくさんのおきやくさんをのせて、あんぜんにもくてきちへおくりとどけている。

しゅつきんじかんのいちじかんまえにかいしゃへいき、バスのてんけんをする。みちじゅんをかくにんして、じゅうたいやこうつうじこのじょうほうもかくにんする。アルコールチェックをして、やつとおきやくさんのもとへしゅっぱつする。

このなつやすみ、ぼくははじめておじいちゃんがつうてんするバスにのつた。

ゆびさしでひとつひとつあんぜんをかくにん。はっしやするとき、ていしやするときのアナウンス。おきやくさんがおるときは、「ありがとうございます。」「とひとりひとりにこえをかける。

しゅうてんにつくと、おじいちゃんはいちばんうしろのせきまでひとつひとつみまわりして、わすれものやのりすごしたおきやくさんがいないかかくにんする。

このていねいなしごとのおかげで、おじいちゃんはバスのうんてんをはじめてからさんじゅうねんかん、いちどもじこをおこしたことはない。

きょうもおじいちゃんは、あんぜんうんてんでおきやくさんをもくてきちへおくりとどけている。

# ぼくとおとうさんの しょうがつころ

三田ヶ谷小学校 一年

萩原 雅稀

4がつ ぼくはしょうがつがくせいになった  
おとうさんとおなじみたかやしょう  
にゆうがくしきはおおきなたいいくかんに  
どきどきしちやったけど  
おとうさんがつかったかもしれない  
つくえといす  
よんだかもしれないとしよしつのはん  
あそんでいたおつきなこうてい  
ぜんぶにわくわくする

おとうとに  
「ずるい。」  
つていわれる  
「ぼくもみたかやしょうにいきたい。」  
つて

ぼくが二ねんせいになったら

あたらしくとうごうするんだって  
おとうさんがいつてた  
一ねんしかいけないって  
なんだかさびしい

だから あたらしいこうしょうは  
みたかやの「三」がはいった  
マークだったらいいな  
もつともつとみたかやしょうで  
ともだちとべんきようしてあそびたい

でも

「おなじはにゆうのがっこうだから  
いいんだよ。  
あたらしいがっこうもともだちが  
いっぱいでのしいよ。」  
ぼくはおとうとにいう  
ぼくじしんにいうように

# ぼくのひまわり

三田ヶ谷小学校 一年

廣澤 蒼人

きよねんとれた ひまわりのたね  
つちのべつとにねかせるよ  
ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ  
あたたかくして おやすみなさい

まいにちみずをあげて めがでるのをまつ  
まだでない まだでない  
ぼくはまいにち のぞきこむ

みつけたよ  
ちいさなはっぱ こんにちは  
おおきくなるの まってるよ

はっぱがゆらゆら かぜとだんす  
ぐんぐんのびて おおきくなった  
ぼくのせ すぐに おいこした

みつけたよ

ちいさなつぼみ こんにちは  
さくのがたのしみ もうすぐだ

ぱつとひらいた おおきなひまわり  
にっこり ぼくにわらってる  
ぼくもにっこりわらったよ

ぼくのひまわり きれいだな

## わたしの好きな音

羽生北小学校 四年

古谷 彩結

ギラギラした太陽の光

夏を知らせるセミの声

それに負けない大きな音

強く打ちぬいたボールが

床に打ちつけられる音

今年、ずっとやりたかったバレーボール

チームに入った

始めたばかりの時は

レシーブもサーブもアタックも

思っていたよりむずかしい

思う様に出来ない

何度も何度も失敗する

それでもめげずにチャレンジする

サポーターをしているから

レシーブだってこわくない

コーチが

「早く来て、ボール練習していいよ」

と言ってくれた

次の週から三十分早く行く

少しでも長くボールにさわりたい

みんなが集まる時には

私は、すでに汗だくだ

ウオーミングアップはバッチリ

今日も練習が楽しい

サーブが入る

アタックを打つ

床に打ちつける音が

体育館中にひびく

二十五点中の一点

みんなでつないだ一点

今日も体育館にひびくボールの音

わたしの好きな音

## その他の良い作品

作品は羽生市ホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
わたしのすきなばしよ	三田ヶ谷小学校 一年	有住 春
すきなあさ	川俣小学校 一年	今西 美尊
感動をあたえるスポーツ	羽生南小学校 五年	梶原 愛咲
ぼくとカブト虫	手子林小学校 四年	北 侑馬
大きなイチヨウの木	新郷第一小学校 三年	島村 紗奈
あめのひ	羽生南小学校 一年	祖父江 珠与
羽生の大事な宝物	羽生南小学校 六年	富田 芽吹
まちにまつた なつまつり	手子林小学校 一年	中村 文音
夢をくれた人	手子林小学校 六年	野本 嘉代
みんなのおまつり	三田ヶ谷小学校 一年	萩原 菜々子
ぴーちゃん	羽生南小学校 五年	矢吹 優

## ◎中学生の部

### 太田玉茗賞

#### サブメンバー

東中学校 三年

高橋 里桜

いわゆる私はバレー部のスタメンではない  
それでも毎日必死に練習した

仲間と一試合でも多く勝つために

得意のサーブを磨くために自主練もした

試合中いつ呼ばれてもいいように心と身体  
のコンディションは整えておく

それでも試合に出られない日もある

私はそれでも構わなかった

主要メンバーが思いつきりプレーできるよう  
あらゆるサポートに回る

仲間がミスをした時は誰よりも精一杯大きな  
声で応援する

怪我をしてしまった人が出た時は代わりにプ

レーする

荷物を率先して運ぶ

それが私の役割だと思うから

試合に出られなくても私の気持ちは一緒に  
戦っている

三年生の春の県大会でピンチサーバーに呼  
ばれた

接戦の重要な場面だった

期待に応えたい気持ちと緊張で焦る

でも全てはこの時の為に準備してきたのだ

絶対決める 決めてやる そう強く決心する

私のサーブが相手の選手の目の前にストン  
と落ちた

サーブミスでこのセットを勝ち取ること  
ができた

サブメンバーの私が最初で最後のMVPにな  
れた瞬間だった

今までの努力が全て報われた気がした

嬉しかったけど少し照れ臭かった

部活はもう引退した

今は受験と戦っている

次の主役は私だ

## 宮澤章二賞

### 曾祖母の味

西中学校 二年

古谷 柚結

私には大好きなおにぎりの味がある

お弁当の時は、絶対に

この味を作ってもら

そぼろと炒り卵を混ぜたおにぎり

私が初めて食べたのは、

小学校の低学年の時

母が二色丼で作ってくれた

とても美味しかった

母に

「美味しい」

と伝える

母は

「ひいばあ味の味だよ」

と言った

昔、曾祖母がお昼によく母へ作ってくれて  
いたと聞く

甘じよっぱい炒り卵

母も好きな味と初めて知る

曾祖母は天国にいる

今もなお、受け継がれる味

母が作っているところを見る

調味料は全て目分量

私は驚いた

曾祖母も目分量だったらしい

母が言う

「ひいばあが作った方が

もつと美味しいよ」

食べてみたかったな

曾祖母の炒り卵

今日のおにぎりもそぼろと炒り卵

私の大好きな味

曾祖母の味

## 優秀賞

### 桃のパワー

東中学校 三年

木村 悠聖

梅雨が明けると

まるで世界が変わったような暑さ

僕は暑いのが大の苦手だ

それでも「夏が待ちどおしい」と

ワクワクしてることがある

中学最後の県大会まで残り数日

練習を終え汗だくで家に着くと

インターフォンがなった

清水白桃と書かれた大きな箱

「やったー。夏が来たって感じだね。」

「早く開けよう。三、二、一、オープン。」

と妹、弟もにつこり嬉しそう

箱を開けると甘い香り

一瞬で疲れが吹き飛んだ

白くてほんのりピンクがかった

まん丸大きな桃がいっぱいだ

今すぐ皮ごとかぶりつきたくなつた

手にとりしばらく眺めてみると

やさしい心になれるような気がした

とてもかわいいな

こんなに癒されるフルーツは君だけだ

僕は皮が手でむけるくらい

やわらかくして味わうのが好き

とろける甘さがたまらない

最高だ

丸ごと一個かぶりつくなんてぜい沢すぎる

甘い汁がポタポタたれる

果汁百パーセントのジュースだ

種の周りまできれいに食べて

ごちそうさま

甘い果肉に甘い果汁、そして甘い香り

あー幸せだ

大好きな桃をほおぼって

暑さと自分とライバルと

戦うパワーをもらったよ

県大会に受験勉強

全力で頑張ろう

おばあちゃんありがとう

## 私のふるさと

東中学校 三年

柿崎 未来

「ふるさは 遠きにありて思うもの

そして悲しくうたうもの」

とあるが 私のふるさは 車で十五分

祖母が宮城の 片田舎から引越してきた

あそびに行くと

「みくちゃんアイス食べる?」

「みくちゃん桃食べる?」

「みくちゃん煮物あるよ。食べる?」

と食べ物を出してくる

そして祖母の子どもの頃の事を

たくさん話してくれる

祖母の住まいは

自然がすぐく多い訳でもなく

一般的に言うふるさとの印象とはちがう

でも私は祖母の優しい心に

笑顔に触れると

日常からかけはなれた 安心感をもらえる

私にとってのふるさは

祖母の存在 そのものなんだと思う

これからも 元気で長生きしてほしい

私もおばあちゃんになったら

孫たちに 安心感を与えられる

今の祖母のような 存在になりたい

長い人生の中で 喜怒哀楽

様々なかつとうが あったことだろう

その出来事が やすりの役割をし

優しい丸い雰囲気 祖母がいるのだろう

私のこれからの人生

いろいろな経験をすることだろう

これから出会う 一つ一つの出来事に

真剣に向き合い 逃げることなく

自分を磨いていけたらと思う

いつか誰かの

心のふるさとなれるように

## 一点

南中学校 三年

山下 心暖

あと一点

あとたった一点で県大会

夢にまで見た最高の舞台

自分のサーブから 相手のレシーブ

ラリーが続く

あと一点 ミスをしてたまるか

その思いだけが

ラリーを

鼓動を

速くしていく

仲間が応援してくれている

この期待に応えなくては

あと一点 あと一点

声援が拍手へと変わる

喜びが 心と体を満たしていく

やった 勝った

この一点を取ったんだ

たった一点

でも それは

自分の力だけのものではない

仲間がいたから

先生がいたから

支えてくれる人がいたから

だからとれた

一点

みんなでとった一点

それを忘れずに

今日も生きていく

## 奨励賞

今年の夏は…

東中学校 三年

小澤 叶愛

今日も暑いね！  
ほんと暑いね！  
毎日のように交わされる言葉  
熱中症にご注意を！  
テレビの天気予報からも  
羽生市の放送からも  
聞こえてくる

今年の夏はほんとに暑い  
私は中学三年生  
私にとってもほんとうに暑い夏  
三年間がんばった部活動  
最後となる夏の大会  
暑さに負けず仲間と共に戦い

勝ち取った地区大会優勝  
そして受験に向けてがんばる夏  
志望校合格を目指して  
今までとはちがう夏休み

ふと空を見上げると  
もくもくと入道雲  
ザアーと雨が降ってきた  
少し涼しくなるといいな  
雨がやんで明るくなった空には  
大きな虹がかかっている

次の春、私の心にも  
大きな虹がかかりますように

## じいちゃんとの思い出

南中学校 一年

木暮 奏南

私には楽しみが二つある

私のじいちゃんは寒くなると庭の花壇にチューリップの球根を植える

私達が進級する春

チューリップの花は明るく元気に咲きほこる

春の暖かさと元気をもらって

登校するのが楽しみの一つ

もう一つの楽しみが

窓ごしに手を振ってくれるじいちゃんの姿

じいちゃんからも元気をもらって登校する

そんなじいちゃんが日に日に体力が

なくなっていく

好きだった花も植えられなくなった

花壇も庭もさびしくなった

それでも私が学校に行く前

窓から笑顔で手を振ってくれた

私も笑顔で手を振り返す

でもそれもなくなった

今年の夏じいちゃんは天国へ旅だった

今日の朝も窓を見る

そこにはじいちゃんが座っていた椅子

じいちゃんの姿はない

でも私にはじいちゃんが笑顔で手を振ってく

れているような気がした

私の心の中にはじいちゃんがいる

花が大好きな優しい

笑顔のじいちゃんがいる

「行ってきます」

と心の中で言って

強く自転車のペダルをふむ

# 僕のがれ

西中学校 一年

関根 玲牙

テレビで見たバスケの試合

ドリブルで 大きな相手をすりぬける姿に  
あこがれて

僕は バスケ部に入った

チームスポーツは初めて

それでも やってみたいと強く思った

僕以外 経験者

上手くなれるのか 不安な気持ち

夏の積乱雲のように

むくむくとふくらんでいく

キュツと鳴るシューズの音

ゴールに吸いこまれるボールの心地よい音

足の裏から伝わる振動

先輩達はすごかった

そんな先輩達のようになりたくて

チームを

サポートできるメンバーになりたくて

練習を重ねる

僕の汗を吸った体操着は

よろいのように

ずっしり重くなる

初めて出た試合

何もできなかった

ボールが手にかするだけ

悔しい

今度は 悔しい気持ち

僕の中でふくらんでいっぱいになった

アドバイスをしてくれる

先生や先輩 仲間達と一緒に

勝つ喜びを分かち合いたい

その時は

皆で跳び上がって喜ぶんだ!

コートではずむボールみたいに

その時の僕は

きつと 感謝と喜びで満たされているはず

## 繰り返し返す

南中学校 二年

羽生 睦翔

部活が始まった体育館に

あふれるたぐさんの音

「キュッキュツ」

靴が床とこすれる音

「ダンダン」

ドリブルする音

「スパツ」

ゴールにボールが吸い込まれる音

「ナイツシヨ」「フアイト」

仲間を励ます大きな声

新チームになり技術上達に励む日々

取りやすいパス

力強いドリブル

華麗なシュート

どうしたらできるだろうか

教わったことを意識して練習する

仲間に聞いてみる

何回も繰り返し返す

でも上手くないかない

わからないことがある

今度は自分で考える

でもやっぱりうまくいかない

「キュッキュツ」「スパツ」「ダン ダン」

何回も繰り返し返す

みんなでも繰り返し返す

「スパツ」「スパツ」「スパツ」

ボールが少しずつゴールに入るようになる

「スパツ」「スパツ」「スパツ」「スパツ」

上達が目に見えてくる

自信がついてくる

そしてチームが一丸となる

そんな日を目標に

部長として努力する日々

また今日も繰り返し返す

## 音が教えた大切さ

東中学校 二年

濱野 颯介

チューバとの出会いから

約一年が経った今、

去年のコンクールでの銅賞は

心に重く響いていた。

演奏の精度や表現力、

様々な課題が残り、

その冬は挑戦の日々だった

でも、諦めることなく

僕たちは立ち上がり、

音を磨き、心を通わせ、

日々の練習に全力を注いだ。

四月には後輩も加わり、

後輩も一生懸命ついてきてくれて、

仲間とともに音を重ねた。

そして迎えた夏のコンクール、

先生が指揮棒を上げた瞬間、

ブレスの音がホールに響き、

そこから演奏が始まった。

音が一つになる瞬間、

その喜びは何にも代え難い。

僕たちは、心を込めた演奏で

ついに金賞を手にした。

その後先生が言った、

「努力の結果がついてきた。

だから、部活以外のことにも、

努力を惜しまずに取り組んでほしい」

その言葉が心に響いた。

僕は誓った、

この経験を胸に、

これからも色々なことに

努力を惜しまず挑戦し続けると。

## その他の良い作品

作品は羽生市ホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
夏の音	南中学校 一年	荒井 天翔
後悔しないために	東中学校 二年	奥泉 直大
おばあちゃんのまほう	東中学校 二年	小澤 うた
入部までの想い	東中学校 一年	木村 瑠菜
終電の中で	東中学校 一年	小久保 晴希
繋ぐ	南中学校 二年	佐藤 瑛太
書の道	南中学校 三年	澤田 俊輝
僕の熱い夏	南中学校 三年	関根 伶
節目	南中学校 三年	富田 渚月
「ありがとう」と。	東中学校 三年	長嶋 月雫
自転車通学	南中学校 一年	平岡 桜充
剣道部の音と「藍」	南中学校 一年	松澤 瑠泉



# 羽生市制施行70周年記念

## 第二十回 小中学生「ふるさとの詩」募集要項

利根川の流に生まれ、四季おりおりの美しい自然に恵まれた羽生市は、日本の近代詩史に名をとどめた、太田玉茗を生んだまちであり、田山花袋の小説『田舎教師』のふるさとのまちです。

また、羽生市出身の宮澤章二は、市内の多くの校歌を作詞した詩人です。

この二人を郷土の偉人として尊敬し、顕彰するためにも、みなさんの「ふるさと」を一篇の詩にして、応募してみませんか。

### 1 募集作品

- ・「ふるさと」を題材とした作品、または自由題  
(家族、友だち、自然、伝統行事など、心に感じたことを書いてください。)
- ・自作で未発表の作品(過去に書いた作品でも構いません。)
- ・応募作品数は一人1篇

### 2 応募方法

- ・400字詰め原稿用紙B4縦書、表題・氏名・本文で2枚以内の作品。
- ・各学校で取りまとめ、名簿を添付のうえ提出をお願いします。

### 3 応募資格

- ・市内の小学生・中学生

### 4 応募締切

- ・令和6年9月5日(木)

### 5 発表

- ・令和6年11月下旬に通知

### 6 賞

- ・小学生の部・中学生の部  
各部門とも、太田玉茗賞 1篇、宮澤章二賞 1篇、優秀賞 3篇、奨励賞 5篇
- ・賞状と盾を贈呈します。

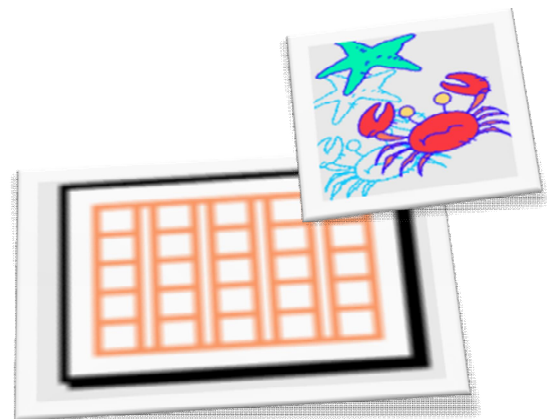
### 7 その他

- ・応募作品の著作権は主催者に帰属し、作品は返却しません。
- ・入賞者の作品・氏名・学校名・学年については、広報及びホームページに掲載するほか、報道機関等に公表します。
- ・ホームページには、過去の作品も掲載されておりますので、参考としてご覧ください。

### 8 主催 羽生市

### 9 応募・問合せ先

羽生市役所秘書広報課 〒348-8601 羽生市東6-15 Tel.561-1121(内線204)



●第二十回 小中学生「ふるさとの詩」募集結果

小学生の部	233篇
中学生の部	371篇
応募総数	604篇

●選考委員（五十音順）

塩田 禎子  
根岸 光子  
萩原 澄江  
松村 洋彦  
水野 栄子

発行者 羽生市総務部秘書広報課

発行日 令和7年1月21日

